



Newsletter
No.96

2025年12月1日

発行 レイバーネット日本
〒173-0036 東京都板橋区向原 2-22-17-108
http://www.labornetjp.org
labor-staff@labornetjp.org
TEL&FAX 03-3530-8578

高市ノー！文化で時代に立ち向かおう

—レイバーフェスタ 2025、12/28 に開催—



参政党の躍進、高市政権の成立と日本社会は右へ右へと雪崩を打っている。その極みは「高市の台湾有事『存立危機事態』発言」だ。11.19国会前デモで乱鬼龍さんは「高市が無能で日本存立危機」のむしろ旗を掲げ、注目を浴びていた(写真)。戦後80年の今年だが、極右政権が日本国憲法をぶつつぶす勢いだ。これはまずい、相当にまずい。

私たちの暮らしも賃金は上がらず、止まらない物価高が押しよせている。なんとかしよう、声をあげよう！それには「平和・人権・民主主義」の左派の力を盛り返し、広げることだ。私たちレイバーネットも「はたらくものの情報ネットワーク」として、できることをしっかりやっていきたい。

★リアルの出会いの可能性

いつもバタバタのレイバーネットだが、2025年秋の活動は余裕を持たせようということで、月2回だった「レイバーネットTV」を月1回にした。準備に時間をかけ、一つひとつの番組を丁寧にという趣旨で、9月「戦後80年・路上大学」10月「若い世代のバレスチナ連帯」11月「病ますます深まる郵便局職場」と、問題を深掘りすることができた。とくに「病ますます深まる郵便局職場」では、被害当事者が直接訴える内容で、レイバーネットTVが掲げてきた「アクティブ・ラジカル・現場から」を地でいくものだった。

もう一つよかったのは、リアルに集まるイベントが二つできたことだった。一つは「笠原真弓さんを偲ぶ会」(10月4日・ギャラリー古藤・33人)だった。「死者が生者を結びつける」という言葉どおり、笠原さんの生きた軌跡が、さまざまな分野の仲間をつなぎ、素晴らしい集いとなった。もう一つは「抵抗川柳句集シンポジウム」(11月3日・スペースたんぽぽ・35人)だっ

た。長年の川柳班の仕事が内容の面でも人脈の面でも、見事に開花した。反戦川柳作家の鶴彬(つるあきら)の精神を受け継ぐ「レイバーネット川柳班」の面目躍如だった。二つに共通したのは、リアルに人と人が出会うことで、新たな可能性が生まれることだ。会員も増えた。今後もオンラインだけでなく、「リアルの集まり」に力を入れていきたい。(報告は2面、3面を参照)

★レイバーフェスタは板橋で

今年のレイバーフェスタは12月28日(日)、初めて板橋区のグリーンホールで開催する。会場費がリーズナブルで、キャパも大きく使い勝手がよさそうだ。なにより再開発とたたかう「大山商店街」のあるところだ。そんなわけで「特別企画：その再開発は誰のためのもの？——声を上げる市民が手を結ぶ」をすることになった。

またレイバーネットで応援してきた「韓国オプティカルハイテック」のたたかいが、韓国KBS(日本のNHKにあたる)でドキュメンタリー番組になり、11月に放映された。そのホットな映像が「レイバーフェスタ」で日本初公開される。タイトルは『高空籠城600日』。理不尽な「食い逃げ企業」日東電工を許さないと屋上に籠城して、命を賭けて声を上げた記録である。「オプティカル」のたたかいは、韓国だけの問題ではなく、私たち日本の企業・労働者が問われる問題だ。

その他、恒例の「音楽・川柳・三分ビデオ」もある。反戦川柳人・鶴彬の生涯を語る新作講談『雲外へ翔る鶴彬』(菅原織司)も見逃せない。「レイバーフェスタ2025」のスローガンは「文化で時代に立ち向かおう」。高市の時代を終わらせるためにも、フェスタに参加し、一緒に声を上げましょう。詳細は同封のチラシを参照してください。



今後のレイバーネット活動案内

- 川柳句会 12月6日(土) 18時半
郵政共同センター 兼題「冬」
- レイバーネットTV223号 12月10日(水)
「映画と本で振りかえる2025年」
- ブッククラブ読書会 12月13日(土)
テキスト『従属の代償』
- レイバーフェスタ2025 12月28日(日)
板橋区グリーンホール

会費・カンパ・賛同金のお願い

ニュースレター前号(7/1)で窮状を訴えたところ、多くの会費・カンパが寄せられました。おかげで11月末時点での手持ち金額は100万円になりました。今後は大きな出費(会場費・ニュース発送費・ウェブ改善費など)の節約を進め、財政安定に努めたいと思います。引き続き、会費・カンパ・フェスタ賛同金の納入を節にお願いします。宛名のところに会費の納入状況が記載されています。同封の振替用紙をご利用ください。なお2026年より連絡先電話が「TEL&FAX 03-3530-8578」の一本になります。(事務局)

『抵抗川柳句集』シンポジウム 「未来を拓く、新しい川柳よ興れ！」

川柳めぐって議論沸騰！～ハラハラドキドキで盛り上がる



11月3日14時より『抵抗川柳句集』出版記念シンポジウムは、東京・水道橋の「スペースたんぼぼ」にて、高鶴礼子さん（川柳作家・ノマエ ノマシス主宰）と榎沢健さん（文芸評論家）をゲストにお招きし、レイバーネット日本川柳班・乱鬼龍さんの進行で開催されました。



榎沢健さん（文芸評論家）をゲストにお招きし、レイバーネット日本川柳班・乱鬼龍さんの進行で開催されました。

第一部はゲストのお二人によるお話、第二部

は参加者全員で『抵抗川柳句集』の感想などについて一言ずつ発言する構成で、シンポジウム終了後には会場近くのお店にて懇親会も行われ、ゲストも交え参加者同志の交流を深めました。

高鶴礼子さんからは、レイバーネット川柳班では時事川柳が中心だが、報道の後追いになったらそこで終わり、読者を立ち止まらせるような川柳にするためにはもう一つプラスアルファが必要だということ。高鶴さんご自身は「一人の人間がわたしを書く」「いま、ここ、わたし」がこれを書くんだという立ち位置で書いている、という川柳を作るときに自分とどう向き合い、どう研ぎ澄まして高めていくかについてお話されました。

また、川柳に命を懸けた鶴彬の絶筆6句についての解説と、絶筆6句が掲載された現在数冊しか残っていない川柳誌「川柳人」をお持ちいただき、皆に見せて下さいました。鶴彬が収監され亡くなってしまった元となった6句は、川柳投稿欄ではなくエッセイの頁の片隅にあったということを知り、驚きました。

榎沢健さんからは、川柳と言うのは座の文芸から始まって人が集まるための文学であり、集団の文学として色々な句や意見を集めて皆で作ることで成長していく文学であること。互いに影響を及ぼしあいながら、気付いたり向上していくことが重要という、レイバーネット川柳班の活動の内にある意味や意義を解説するようなお話でした。また、川柳創始者である柄井川柳が何故川柳を始めたのか、それは和歌や俳句のあり様に対する反逆と抵抗からである。という考察も大変興味深かったです。

★「川柳は必死の生き方だ」（鶴彬）

乱鬼龍さんからは何のために作り、集まり、発表するかという原点を考えたら、様々に矛盾だらけの今の世の中で、矛盾と向かい合って「異議あり！」と声を発することができます。表現とか川柳や文芸のポイントじゃないかと思っています。現在の川柳界で時事川柳は超少数派ですが、鶴彬が「川

柳は必死の生き方だ」と言っている通り、生きているという事世の中と関わるということで、政治は関係ないとか言っても政治のつけは必ず私たちに来る。表現する者は一生懸命今の時代と格闘するくらいの覚悟がないといけないうじゃないかなと思ってやっているわけです、と。今回の抵抗川柳句集を編んだ思いを話されました。

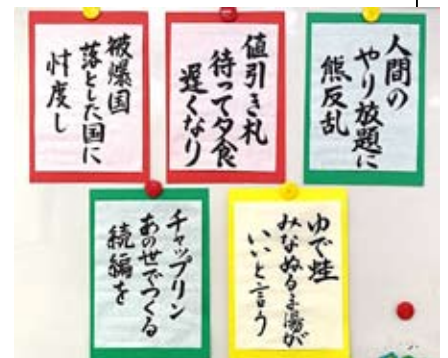
シンポジウムでは「兼題があるのが本流か、雑詠が本流か」「五七五の定型は縛りか膨らみか」について、高鶴礼子さん、榎沢健さんの意見が真向から対立し議論する場面もあり、会場もハラハラドキドキ大いに盛り上がりました。また、創作における個と集団、川柳創作における前近代と現代性についてなど、お二人の丁々発止の議論はつきず、とてもエキサイティングなシンポジウムでした。



第二部では「まえがき」を書かれ、今年7月にお亡くなりになった笠原真弓（白真弓）さんについての話や、レイバーネット川柳班のメンバーから川柳に対するそれぞれの思いや、講談、紙芝居、経産省前脱原発テントなど川柳以外の活動報告も行われました。また会場の参加者からもそれぞれ一言いただき、演劇、俳句、鶴彬顕彰会など様々な活動をされている方々から感想やお言葉をいただきました。北海道や沖縄など遠方から来てくださった方もあり、句集を出版したことで、様々なジャンルの芸術や遠くの方々にも届けることが出来て、川柳に興味を持っていただけた事を嬉しく思いました。

レイバーネット川柳班では毎月苦勞して川柳を作っていますが、今回句集になり、シンポジウムでジャンルの垣根を越えて多くの方々と交流できたことを光栄に思いました。また、ゲストお二人のお話を拝聴して、これからも川柳を通じて社会を見つめよう、川柳を媒介に色々な人と関わって、下手でも真剣に川柳と向き合って行こうという思いを新たにしました。

（報告＝芒野）



季刊『フラタニティ』40号

松原明の連載「歩き続けるレイバーネット第9回」

「戦争コリゴリ」の精神をつなげる

「こんな追悼会なら自分もやってもらいたい」と、正直思った。十月四日に開かれた「笠原眞弓さんを偲ぶ会」（写真）のことである。彼女はレイバーネット運営委員で、TVや川柳で活躍した。今年七月五日に肺腺がんで八二歳で亡くなった。「偲ぶ会」の様子を、堀切さとみさんはこうレポートしている。

・・・ギャラリー古藤は三十人を超える人でいっぱい。安保法制に反対するママの会、有機農業映画祭、レイバーネット、市民運動や消費者運動の人たち。「献杯を頼まれたけど、どうやったらいいのかチャットGPTに教えを請うた」という農業ジャーナリストの大野和興さんに始まり、集まった人たちの話はどれもこれも面白い。「笠原さんは何百本もの映画批評を書いてくれたけど、締め切りを守ったことがありませんでした」「編集者だったのに、最期の校正で自分の名前を間違えていました」「笠原さんのようには生きられないと思うし、生きたいとも思わない」・・・涙の中にも笑いが絶えないスピーチが続いた。三時間、まるでドラマをみているようだった。過去のことを語らなかった笠原さんの人となり、みんなの話からくっきりと浮き上がってくる。こんな追悼会があるんだな。・・・

呼びかけ人の永田浩三さんも「手作りの小規模の偲ぶ会。奇跡のような三時間。二次会も盛り上がる。死者が生者を結びつける。故人の人徳とは、こういうものだと思う」と書いていた。

私も発言する機会があったのでこう話した。「今年戦後八十年と言われているが、八二歳まで生きた笠原さんは、すっぱり戦後を生きた人。だから平和・人権・民主主義の意識が染みこんでいた。笠原さんは自由学園の出身で、まさに『ザ自由人』を地でいった人。彼女はよく『労働問題ってよくわからない』と言っていたが、レイバーネットの活動にすっかり溶け込んだ。それは彼女の資質とレイバーネットがもっている自由・民主主義との相性がよかったのだと思う。追悼会の内容がまさにそれを体現している。高市政権の登場で厳しい時代になると思うが、笠原さんの遺志を引き継いで頑張っていきたい」と。

＜「国民の上に国家」の高市政権登場＞

「日本人ファースト」の参政党の躍進、そして極右の高市政権発足で日本の社会が大きく変わった。戦後八十年のいま、もう「戦後」ではなく「新たな戦前」と思えてくる。私が以前つくった川柳に「いまこのへん昭



和年表にらめっこ」がある。いまどのへんなのだろう。一九三一年の「満州事変」が十五年戦争の始まりだったが、いまは「満州事変」の数年前あたりに思えてならない。以前はソ連・北朝鮮が仮想敵国だったが、いつのまにか中国が仮想敵国とされた。すべて米国の都合であり、米国のいいなりで日本の大軍拡・戦争準備が進んでいる。おかしすぎる。

まだ日本国憲法があり建て前の平和主義・民主主義は言葉では残っているが、とても危うい。参政党の憲法草案では「天皇が元首で、国が主権を有する」とされている。高市早苗は首相就任の初会場で「国家・国民のため結果出す」と述べたが、言葉の順番でわかるとおり、国民より前にまず国家なのである。高市政権の最大の狙いは日本を「国民主権」から「国家主権」に変えてしまうことだ。一九七〇年代の警職法反対運動のとき、横暴な警察の取り締まりに対抗する市民運動があった。そのときのスローガンは戦前の「オイコラ警察はごめんだ」であり、この言葉が反対運動に火を付け悪法をとめた。しかしいまこの「オイコラ」が復権し、国民の上に国家が置かれようとしている。

＜「言論・表現の自由」のたたかい＞

こんな「新たな戦前」はいつから始まったのだろうか。ずっと以前からさまざまな分野で「戦争できる国」に進んできたが、私が感覚的に感じているのは二〇一四年の「九条俳句事件」だった。さいたま市の女性が詠んだ俳句「梅雨空に『九条守れ』の女性デモ」が政治的だとして、市の公民館が月報への掲載を拒否した事件である。国会議員会館でも「九」の字がついたTシャツやグッズが問題にされて入館を拒否されることが起きている。安倍政権成立が二〇〇六年だが、自治体職員や公務員は戦争に向けて国が動いていることを肌で知り、自己保身のために忖度して、国民チェックを始めたように思える。

（続きは4面へ）

新会員紹介

●「ACT あすへ@武蔵野」を主宰 田辺久人

吉祥寺リタイアシアニアです。任意団体「ACT あすへ@武蔵野」を主宰し「子・孫のより良い未来の為に」を掲げ、ささやかな活動をしています。週2回「反・安保法制」のスタンディングを駅前で、週2回子育て支援施設で0～3歳の子どもたちと遊ぶボランティア、週3～5回、様々な勉強会に参加し、気づきをグループチャットに発信、住宅街のヒートアイランド化阻止のアクションなどを行っています。最優先課題は、①安保法制を廃止し9条を復活させ大軍拡阻止 ②「若者の貧困」、「子どもの貧困」、「大学生の学費高騰による困窮」の抜本的改善 ③教育現場の「崩壊」の抜本的改善 ④脱原発 ⑤選挙制度改革、女性議員を5割に、です。よろしく。

●柏崎刈羽原発再稼働を阻止したい 漆原牧久

新たに会員にさせていただきました、漆原牧久（うるしばらまきひさ）と申します。東京都足立区在住の退職者です。学生の頃から環境問題に関心があった関係で、経産省前テントひろばを始めいくつかのグループに属し脱原発の活動をしています。今、柏崎刈羽原発再稼働の動きが切迫して

います。柏崎刈羽原発の電気は首都圏で使われますから、ここ首都圏で「原発電気はいらない」と声を上げ再稼働を阻止しなければならないと考え、10月24



日から毎週金曜日 18:15～19:15 首相官邸前で抗議行動を行っています。また、経産省前テントひろば事務所にて月1回学習討論集会「脱原発カフェ」も開催しています。みなさんの参加をお待ちします。

●「歌は世につれ」時代を読み解く 長能一秀

はじめまして、長能といいます。コロナ後遺症？で運動に積極的に参加しているわけではありませんが、ご挨拶いたします。若い頃から色々な運動に関わってきましたが、今は東京労組の末席でお茶を濁しております。関心としては「同志的家父長制」を克服するには、かな？（笑）最近、中島岳志、宮台真司、などを読んでいます。ミニシバリズムにもおおいに関心があります。カラオケおじさんです（笑）。「歌は世につれ」などと言いますが、歌謡曲に反映された時代を読み解くことなども趣味です。機会がありましたら、どこかでご一緒しましょう（笑）。あ、団塊の世代ではありませんが、マウント合戦は勘弁してください。

●「パレスチナ解放・ガザ平和祭」上映会 東條守

2025年8月夏季合宿で会員となりました東條守です。DVD版「怒りをうたえ」ダイジェスト版の上映会をさせていただきました。第2弾として「パレスチナ解放・ガザ平和祭」（107分）のDVD上映会を、ビデオ撮影者田中博一さん講師で企画したいです。2025年10月の山形国際ドキュメンタリー映画祭で最優秀賞に選ばれたのは、2001年に撮ったビデオ映像「ガザにてハサンと」でした。田中さんの作品は2001年、2002年の映像です。2つの作品に共通しているのは、「パレスチナを完全に消すことはできない」というイスラエルに対する「抵抗」です。よろしくお願いします。

（3面からの続き）

対外戦争と国内言論弾圧はクルマの両輪であることは歴史が証明している。権力者にとって、言論・表現の自由を抑えつけることは最大の課題なのだ。私は以前、ビデオドキュメンタリー『横浜事件を生きて』をつくったが、その取材のなかで特高に検挙され拷問を受けた経済学者・平館利雄さんの話をよく思いだす。平館さんの奥さんが警察署に差し入れに行ったときの話だ。奥さんが「うちの夫はなにか悪いことをしたのですか？」と特高に聞くと、特高は「何もしていない。ただ戦争に反対しているからだ」と答えたという。「戦争に反対すること」が犯罪とされた時代である。そんな時代はもう絶対来ない、と私は思っていたが、どうもそうでもないらしい。戦争に反対する言論を抑え、反対する人間を掃き払えば人殺しの戦争はできない。高市はそんな「国家づくり」を必死にやってくるだろう。

二〇二五年秋の臨時国会で「スパイ防止法」が上程されようとするなか、私はとても心配し、緊張している。親は「戦争コリゴリ」の世代だったが、われわれは「戦争コリゴリ」の第二世代だと思う。しかし第二世代も七十歳を超えている。先日十月の「レイバーネットTV」では、「虐殺から手を引くために～若い世代のパレスチナ連帯」を放送した。出演したのは二十代・三十代の若者で、新鮮な眼で戦争を批判していた。「戦争コリゴリ」精神を第三世代につなげていきたいものだ。すっかり押されている「リベラル派」だが、「平和・人権・民主主義」の旗を下ろすわけにはいかない。仲間を広げ、ボチボチと、しかし確実に歩いていきたい。

*季刊『フラタニティ』40号(2025年12月)は880円、申込みはロゴス社.Tel 03-5840-8525

レイバーネット日本の会員になりませんか

現会員数 530名
ウェブアクセス1日 6,000

会員になれば、自分でニュースやイベント、お知らせを提供できます。レイバーネット日本は組合や個人が全国にアピールできる絶好の場所です。

年会費 A会員 3,000円 B会員 5,000円
(AもBも違いはありません。余裕のある方はぜひBで)

郵便振替 00150-2-607244 レイバーネット日本
銀行口座 きらぼし銀行 小竹向原出張所
普通 5002960

入会申込用アドレス apply@labornet.jp.org
電話&ファクス 03-3530-8578